

ふるさと近江  
伝承文化叢書

つちやまの  
むかしばなし

第一集

ふるさと近江伝承文化叢書

つちやまのむかしばなし 第一集

東海道  
五拾三次

土山

廣重



昔話の絵地図



# 鮎河学区

## 北向地藏さん

鮎河の入口から右手へ入ると、奥山という所へいけます。その道中にいろいろな地藏さんがありますが、一番奥の方に北向地藏があります。いつかの台風の時、あたりが皆流されたが、この北向地藏さんは同じ場所で土に埋まっていただけで村人に不思議がられたほど灼かな地藏さんです。

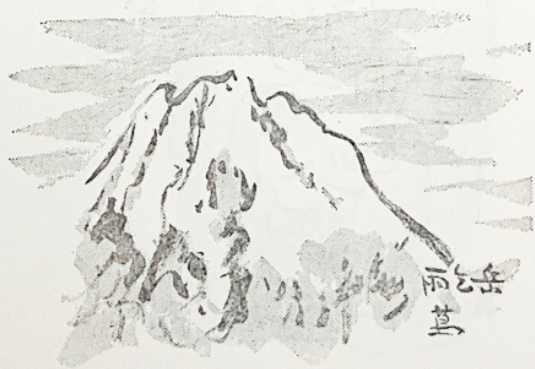
この地藏さんは、人の願い事を一つだけ聞いて下さるとかで、今でも病気の事、子供の事、その他諸々のなやみのために御参りに行く人がたえません。



## 雨乞岳について

鈴鹿山脈の一つに雨乞岳があります。そこは昔、百姓が日照で水不足に悩んで、神仏に降雨を祈るために山に登ったそうです。一心に村人が神に祈っていると、たちまち空がくもって来て雨が降り出し、その雨が大きな池になり、その雨で田畑がすくわれました。今でも雨乞岳の頂上には、大きな池がありそのときに祭った祠ほくらがあるそうです。

日照りがつづき、雨のありがたさを思うとき、今でも鮎河では、雨乞岳の池をかきまぜに行くと近日中に雨になるようだと言えられます。



## 鮎河の城跡

鮎河には、城跡が二か所ある。一つは、西野の北の方にある土山城、もう一つは、東野の南の方にある鮎川城である。

土山城の築城の年は、文明年間、一四六九年から一四八六年までで、土山鹿之介盛忠という人がこの城を築いたらしい。落城の年は天正年間、一五七三年から一五九一年だった。そして、最後の城主は、土山左近大夫盛綱という人だったらしい。私たちは、土山城の城跡へはどこにあるか知らなかったので行けなかった。しかし、鮎川城へは、小さいころに一度行ったことがあったので、行ってみた。しかし、道に迷ってしまって困った。

資料によれば、鮎河村大字鮎河の東方高地にあるが現在は城門の礎石のみが、それも半分土中に埋まっている。廃濠の一部も巾凡そ一間半（約三メートル）長さ十二

鮎河城跡



間（約二四メートル）余が残り、耕地の用水池となっているし、その他は松や桧が生え、田畑等となつて境界ははっきりしない。

建武五年（一三三八年）南朝に属した頼宮弥九郎がここにいたが、同年五月に山中橋六小佐治右衛門三郎、美濃部兵衛三郎等が、佐々木秀綱に攻め落された。その後永祿年間に黒川玄蕃佐がこの地を領したとき、その跡に寺を建立して正等院と号して菩提所に充てていたが、天正四年に織田信長が命じて僧春好に安土の総見寺に移させた。そのとき正等院の釣鐘まで持って行ったということである。春好は後に還俗して山中大和守俊好と名前を変えた。これが水口町宇田の山中橋左衛門長俊の弟で慶長三年七月十五日に死んだということである。

私たちが行ったときには、石段がくずれ落ちていた。それは今から約三五年くらい前に鮎河の人たちが、ちがうところに大きな石を移したと聞いた。

私たちみんなの感想は、今、この城がどんな風にどんな形の城だったのか、まったくわからないから、自分達で想像することしか出来ないと思った。

歴史上に残っている織田信長が、身近かな鮎河に来ていたのかと思つた。

鮎河には城跡が二か所しかないけれど、ひょっとしたら、その他にも、まだ城跡が残っているかも知れない。

## 伝説の思い出を記す

鹿児島県種子島にポルトガル人が漂着し鉄砲（火縄銃）が我が国に伝えられたのが今から四四〇年ほど前である。

私が小学生時分から伝説として聞き覚えている猟師三上三郎（一名、鮎河弥九郎）が鉄砲を持って猟に来たのであるから、おそらくその年代以後のことと推測される。その三上三郎が（勤王家とも伝えらる）銃を肩に二頭の愛犬をつれて現在の松尾川の下流青土の辺の川を上流に向かって昇ってきた。

なにげなく川面を見ると、二、三葉の菜葉が流れてくる。この上流には必ず人家があるにちがいないと判断しどんどん上流に向かって昇って来ると日はとっぷりと暮れていた。そうすると川辺の彼方に一燈の燈がかすかに見える。確かにあそこには人家が



あるに違いないと、ようやくたどり着いたところが、現在の第七組（当時の呼名久保出垣<sup>くほいでがき</sup>）の一隅。位置は旧名、前田源七の裏北隅、久保磯吉の西側、九里直吉の前石段下（ここには昔から井戸代わりに呑み水としてきれいな湧水が清水として溜り、呑んだり、物を冷やしたものである）に一軒の賤家があった。

三上三郎が尋ねると、その家の中には一人の老婆と年若い一人の娘の兩人が抱き合ってシクシクと泣いていた。

三郎が事情を聞き訊すと老婆が語るには、この部落には幾人かの娘がいたが毎夜、深夜になると鬼が出て来て（現在の強盗の類）物品を窃りその上、娘をかつさらって行く。とうとう家の娘が連れて行かれる番になったのでかなしくて泣いているとのことである。その鬼は儂が退治してやると三上三郎はさっそく二頭の猟犬を大きな鹽に入れそれに縄を付けて自分は、つし（二階）に上り鬼の来るのを待った。夜も静まり深夜になると鬼がやって来てつしに人のいるのも知らず娘を掠奪せんとした。その瞬間、三上三郎はつしから縄紐をパッと引いたので、鹽は開き、二頭の猟犬は猛然と夜盗に襲いかかったので賊は一目散に奥山へ向かって逃げた。鹹川の入口に当たる井の口（現在の第五組）の地点において両犬が咬みつきただちに三郎が退治したのである。現在の井の口という呼称は元、犬の口垣<sup>くわい</sup>と呼んだのがいつの時代にか井の口と書き替えられたという。

三上三郎の功績により逢鹿<sup>あしか</sup>（現、鹹河<sup>あいが</sup>と表記する）は平穏な部落となり、以来、三上三郎は逢鹿にとどまり現在の三上権治郎の屋敷の地に、居を定め荒地の開発に力を注ぎ田畑、溝、湯水、等々の農耕

に村人を励まし人心の安定を計って村を起こした。

それから村は日に日に栄え、人戸も増加し、ますます隆盛となった。その功績をたたえ現在の地に三上神社の祭神として祀られた忠犬の二頭は社前に駒犬（木製）として安置されている。

明治四十二年の政令により、鮎河在神の天王さん（第五組、曾我太郎氏前）神明さん（第四組、現小学校地）祇園さん（第七組、貴船神社教員宿舎）吉野さん（第八組、吉野山）大君さん（第一、二組、小倉家一統の守神）の五社が合祀されて三上六所神社となり現在に至り毎年十月十五日、祭典が行われている。

## 方言

子	供	魚	語
メロ	ドメロ	オマエ	トト
ガキ	クソポーズ	ウラ	ケドノ
ワシラー	オマイヨ	ワイ	アンノ
オマイヨ	オマイヨ	ワシ	ソヤデノ
テマユラー	御汁	飯	名
		ママ	梅ヤン
			松ヤン
			石公
			頭尾
			ケドノ
			アンノ
			ソヤデノ



## 犬の口について

昔、今の七組（久保組）の所へおおかみが出る。ときどき人間に危害をくわえるので、こまった村の衆が三上三郎さんに相談したそうです。そこで、三上様がおおかみを退治することになりました。まず入口に近い庭に犬をたらいにふせて自分は二階（つし）に上りおおかみが入って来た時つなのついたらいを引き犬をはなす。犬はおおかみをおいかけ今の奥山の入口まで来て、おおかみをかみ切り退治する。今の井ノ口のはじまりだといひます。

## 吉野さんの祭りについて

三上六所神社として会社しないまでには吉野さんの祭りがあり、城あとやほこらが今でものこっています。吉野さんは堂山垣外の宮さんで祭りにもぎやかに行われたと聞きます。道の上り口に大きな丸い石が今でもあります。それは吉野祭の、のぼりの台としてのこっています。昔は垣外、垣外に宮さんと祭りがあり鮎河同士で、よび、よばれ合いをしたと言ひます。中でも

吉野祭は、御客様が、大勢出て、店屋まで出たときぎます。

## 学林について

昔から鮎河の山は個人山は少なくて学林と言った山が方々にたくさんあったようです。それも時代と共に売ったり統合したりして少なくなりましたが、それでも学林として学校のPTAの方々が、管理運営をしておられるようです。

## おひまち講

二百十日と二百二十日の厄日の、厄除けの行事としておひまち講というのがあります。昔は、それが畑で取れた野菜の手作りの料理を持ち寄り二百十日と二百二十日の両日は、宿持ち回りで神さを祭ったそうです。今のように娯楽のない時代は、みんなで御馳走をいただくのが、たいそうな行事の一つであったと思います。

今では二百十日の一日は組中があつまって御馳走をいただき、組中の親睦をはかっています。



## 白山狐について

鮎河の入口に通称“白山”と言っているところがあります。昔からそこには狐が住んでいると言われました。昔、そこを通る旅人が騙されたとか、土地の人が通って、変な所へつれて行かれたとか、いろいろな噂が広まりました。そこで、今の言う大河原の猟師をしていた〇〇の何兵衛さんが鉄砲を持って退治をしたそうです。古狐と猟師との戦のすえ、とうとう撃ったといいます。それは、たいそうな古狐で真白な白狐でそれから白山狐は出なくなったそうです。